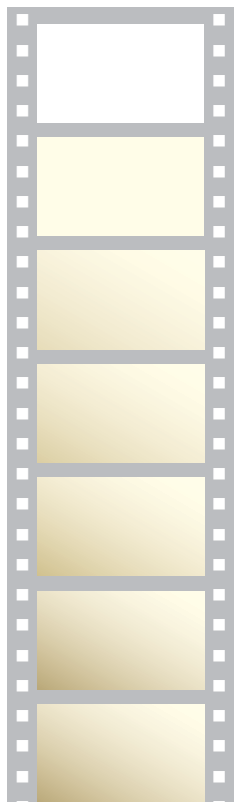
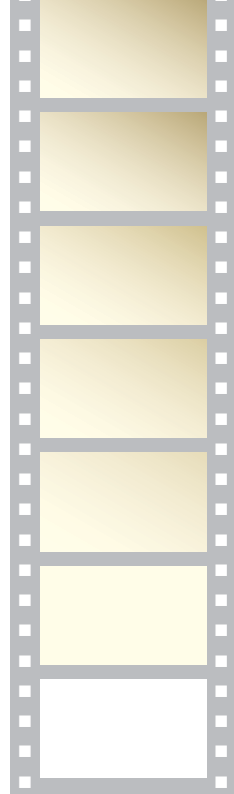


伸<sup>ノ</sup>さんのシネマトーク

鈴木 伸夫



## 第四十回 「名画座もたくさんのハードルを越えてきた」

振り返ると、ぼくはいくつのハードルを越えてきたのでしょうか？高校受験、父の転勤による転入試験。そして、大学入試。いずれもハードルを倒すことなく乗り切ってきました。ご紹介している名画座もきつといくつかのハードルを越えてきているのではないのでしょうか？

映画を観に行った映画館はたくさんありますが、文化人や有名人そして映画人が一緒になって作り上げた名画座があります。

それは、東京銀座の並木通りにあつた「並木座」です。この名画座は53年（昭和28年）から98年（平成10年）まで45年間、日本映画にこだわり続け「日本映画の学校」と言われました。前出のプロデューサー、藤本眞澄サネズミ（戦後、自分のプロダクションで「青い山脈」を製作し、大ヒットさせた人）は、銀座にあるビルのオーナーから「自分の持っているビルにある地下の印刷所が空いたので、何かいい利用方法はないか？」と相談を受けました。藤本は「製作した映画が一週間の上映で終わって





▲銀座並木座の招待券

しまうのは残念だ」と日ごろから思っていただけに、思いつきから「映画館をやればいい」と勧めました。結局、相談の結果、邦画専門の名画座にすることになりました。

並木座の株主は、監督の市川崑、稲垣浩、脚本家の井手俊郎、八住利雄、俳優の小林桂樹、池部良、作家の石坂洋次郎、源氏鶏太、歌手の越路吹雪など、映画人・文化人たちです。しかし株主への配当はなく、その代わり毎月、招待券が送られました。

それ以上映作品を紹介する無料のパンフレット（銀座並木座ウィークリー）は、出資した株主たちへ原稿を依頼して掲載し、そのギャラもありませんでした。

このパンフレットを原寸大で一号から百号までまとめ一冊にした本（次頁）を持っていますが、作品のプロデューサー、原作者、出演した俳優のエッセイなどやイラストが書かれ、この一冊の本だけでも貴重な日本映画の財産だとぼくは思い



▲復刻版銀座並木座ウィークリー  
2007年9月25日発行：三交社

ます。

45年間、日本映画の学校として役目を果たした銀座の並木座は建物の老朽化のため平成十年閉館となりました。そして、スタートからラストまでスクリーンにフィルムを映した映写機二台は、いま、東京の目黒区三田にある東京都写真美術館に収蔵されています。

調べると、名画座もたくさんのハードルを越えてきたことがよくわかりました。

(了)

(文中敬称略)

伸

平成24年4月